

こうして 竹田キャンパスは誕生した

県立芸術文化短大と竹田市は平成20年11月、相互協力協定を結んだ。平成22年4月からは旧下竹田小学校の校舎を「芸文短大竹田キャンパス」として開設した。いま、新たな芸術文化活動の拠点として活用されている同キャンパス。その「誕生秘話」を追った。

協定締結から半年後の平成21年4月、短大にキーパーソンが県庁から赴任する。山蔭政伸事務局長だ。美術科の教員・学生たちから「時間と空間を自由に使える、そんな創作活動の場が欲しい」という要望を聞いた。タイミングよく竹田市には首藤勝次市長が就任した。2人は県立大分舞鶴高校の同級生だった。「廃校後に賑わいを取り戻す方法はないか」。竹田市側のプランに、芸文短大側の「サテライトキャンパス構想」は最適のものと映った。中学校長も同じ思いで、両者の思惑が一致した。

地元の元直入町観光協会長・佐藤正さんも、2384人の卒業生を生み出した小学校跡地の有効活用策を模索していた。短大側からの提案に諸手を挙げて賛成した。

平成21年9月、芸文短大が中心になり、高校生も



交えた「アートキャンプ」が4日間行われた。校舎に宿泊し制作活動を行ったのである。最後の夜は地域の人々とバーベキュー。楽しい交流会になった。「テスト」は成功裏に終わった。

体育館横に桜が咲く平成22年4月8日、竹田キャンパスは開校の日を迎えた。芸文短大OBで美術科非常勤講師(工芸演習)の前田亮二先生が住み込みを志願した。染色作業を十二分に出来る空間は、前田先生にとっても魅力的だったのだ。「赤い半纏」がトレードマーク。門司港アート村でも、小学校跡のアトリエで制作をした経験もあった。「住み込んでみて、地域の人達にこれほど、よくしてもらえとは思わなかった」と笑顔で語る。

前田先生らが講師となって「地域ふれあいアート講座」が行われている。人文系を含む各学科のゼミ研修会もある。近くの長湯温泉で開かれた日韓短編映

画祭(昨年11月)の際には、53人の学生スタッフが2日間、校舎に泊り込んだ。「同居人はたくさんいるに越したことはない。卒業生がどんどん入って来られるような場所になればいいなあ」と前田先生。

キャンパスの1階には「メモリアルホール」がある。旧下竹田小学校の思い出の品々が展示されている。特に、今では珍しい「二宮金次郎の像」が学生たちの人気の的だ。

「若者が入ってくることで、新しい発想が生まれる。大学のない竹田市が学生たちであふれる」。首藤市長が進める構想にとって、竹田キャンパスは重要な拠点だ。キャンパスの賑わいが地域の賑わいへ繋がって行くために、私たちも若い発想とエネルギーを惜しみなく発信して行きたい。(文・中村早希、森本絵美莉)



会場からU-STREAM生中継

第1回日韓短編映画祭で挑戦した「U-STREAM」ライブ中継。13日の映画祭シンポジウムの時には、なんと700人近くが視聴していた。

ブログのコメントでも「U-STREAM、良かったよ」などの声が届いた。当日は、今まで使ってきたLANケーブルが繋がらないなど、ハプニングも多々あった。ケーブルが老朽化していたからだ。それでも、ネット管理の学生スタッフや上映機器を提供した三友株式会社、それに竹田市役所直入支所の方々の

手を借りて、無事に放送することができた。

私たち学生たちだけでは到底、成しえなかったことだ。皆さんには感謝しきれない。映画祭を通して、新しい情報発信の方法を知ることができた。発信手段が増えることで、幅広い選択ができる。私たちの見聞がかなり広がった映画祭だった。(文・中村早希)

U-STREAM:

<http://www.ustream.tv/channel/geitan-live>

九州龍谷短大の作品を見た

日韓短編映画祭の3日目(14日)、九州龍谷短期大学(鳥栖市)の学生作品が3本上映された。どの作品もドキュメンタリー風な表現で、観客に分かりやすい点が特徴的だった。

古賀美沙紀監督「民話を伝える～日本一の語り部～」は、紙芝居を通じて子供たちに民話のよさを伝えるなど、地方の昔話の魅力を引き出した作品。43の民話を記憶している95歳の蒲原タツエさんを中心に、伝統を守っていかこうとする取り組みはずばらしいと思った。

久保康平監督「先生の舞台裏」は、フリーアナウン

サーの副田ひろみさんの前向きな生き方を追った作品である。23歳の息子を事故で亡くした辛い経験を持つ副田さんは、家族が1番大切だと話す。身近にある家族がどのような存在なのか、とても考えさせられた。

同じく久保監督の「軍神～終わらない戦後～」は、真珠湾攻撃で戦死した九軍神の1人である広尾彰さんの人生と家族の気持ちを、とらえた作品であった。21歳で国のために戦死し、「軍神」と称えられる。しかし、310万人の戦死者の1人としてとらえることもできると、彰さんの父が苦悩する場面もあった。



「もし戦争がなかったら、違う生き方があったかもしれない」。私たちの平和に対する意識が問われているようにも感じた。(文・太田有里紗)